

周辺の
みどころ

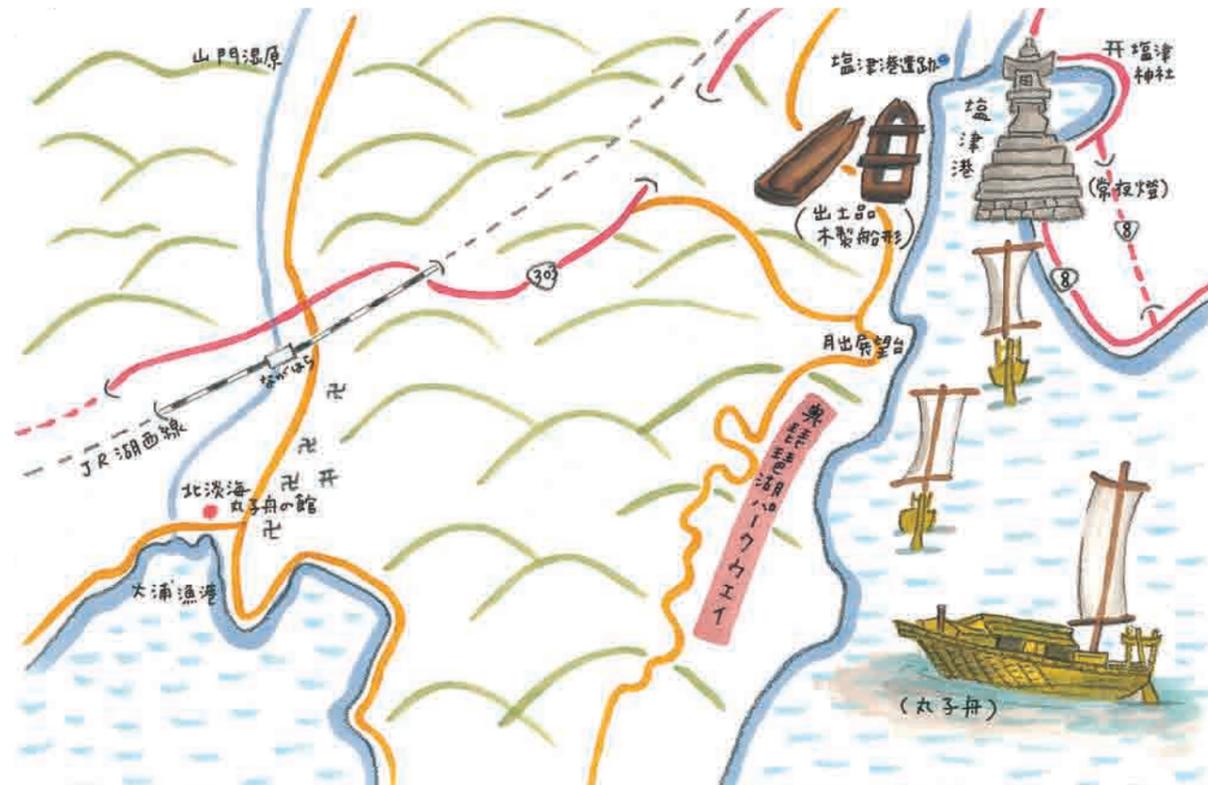
大浦とともに、琵琶湖の北の玄関口として栄えた塩津。120軒もの問屋が並び、20軒を越える旅館や、30軒を越える飲食店など、「人が歩くにも困難な賑わい」と伝えられている。

江戸期の民家はほとんど残っていないが、塩津海道にそって形成された町並みにその面影を見ることができ、塩津神社などにもその風格が感じられる。また、塩津丸山古墳群は、その歴史が古墳時代に遡る可能性を示している。

国道8号線沿いに立つ大きな常夜灯は、そうした塩津の歴史の証人と言えるだろう。



塩津の常夜灯 「海道繁栄」の文字がその性格を示す



【アクセス】

丸船の館 Tel 0749-89-1130
● JR湖西線近江永原駅下車、徒歩約20分

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】
(関連文献/関連施設)

● 滋賀県立琵琶湖博物館 Tel 077-568-4811
実物大の復元丸船を展示。丸船に関する資料も揃っている。

丸 子 船

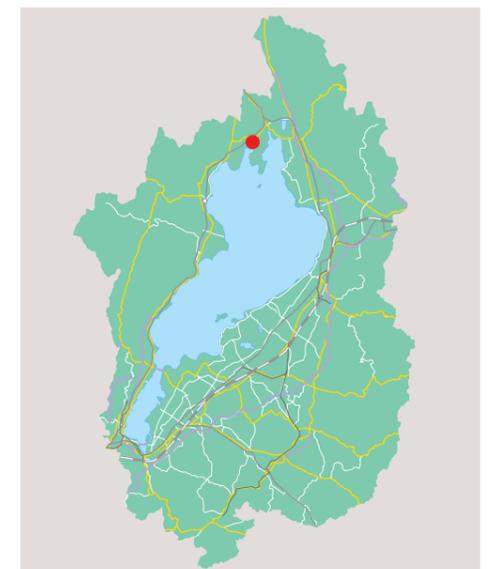
伊香郡西浅井町大浦



丸船の館に保管・展示されている丸船「神輿丸」

琵琶湖を代表する船で、江戸時代から昭和30年頃までは、琵琶湖の主力船舶として活躍した。元禄時代には琵琶湖全体で1,400艘もの丸船が活躍し、それらが大きな帆を揚げて往来する姿は、現在のプレジャーボートとは比較にならない賑わいであつと想像できる。

琵琶湖博物館に復元展示されているものを除けば、現在その姿をほぼ完全な状態で見ることができるのは、西浅井町大浦の北淡海丸船の館に保管展示されている「神輿丸」が唯一である。かつての琵琶湖の賑わいを伝え、湖に活きた人々の歴史の証人と言えるだろう。





「シン」が通った丸子船の船首

丸子船

所在地 伊香郡西浅井町大浦

丸子船とは

琵琶湖特有の構造を持つ船である。その最大の特徴は、船体の側面の「おも木」と呼ばれる部分で、ここに半割りにした丸太をそのまま取り付けることである。これが「丸子船」の語源となっているが、そうした構造とした理由については、浮力の確保や強度の向上など諸説あるが定説はない。あるいは、緩やかなU字形となる船体断面との関係から、船のバランスが工夫されたとも考えられる。

さらに、船の後部、鳥居の形に似た大きな「カサギ」も丸子船の特徴である。帆柱を立てる時の支えと言われるが、実は、大きな舵を上下させるための支柱として使われる。水深の浅い南湖などでは、舵の上げ下げは、船の航行上欠くことのできない作業で、特に丸子船の大型の舵には不可欠な工夫であった。

船体の断面形がU字形となることは、吃水を浅くするための工夫で、船体の後部に位置する帆柱も積み荷状態での船の安定性を確保

するために最適な位置といわれている。

このように、丸子船は琵琶湖での使用のために多くの工夫が施され、これが独特の構造として成立したのである。まさに、丸子船こそ、琵琶湖で活きた人々の智恵と工夫の産物と言えるのだ。

琵琶湖の水運

琵琶湖は日本列島の東西南北を結ぶ大動脈である。江戸時代初期に東・西廻り航路が開発されるまでは、まさに、東・北日本から京都を目指す物資は琵琶湖を通り、また、都の産物は琵琶湖を通過して、東・北日本の各地に運ばれた。

東・西廻り航路が国内流通の主流となる江戸時代中期以降も、「安全・確実・近い」と言う利点を持つ琵琶湖の水運は衰退することなく、依然として重要な交通路として機能し、丸子船を保有する港は、大きな賑わいを見せていた。その状況は鉄道網が整備される明治



在りし日の丸子船の勇姿



かつての大浦のジオラマ

中期まで継続し、さらに、自動車輸送が一般化する昭和30年代までは、丸子船の活躍する姿が見られたのである。

西浅井町と丸子船

琵琶湖の北に位置する西浅井町。その大浦と塩津は、京都と北陸を結ぶ中継地であり、琵琶湖に欠くことのできない港として栄えていた。特に塩津は琵琶湖随一の丸子船を保有

する一大流通基地であり、大浦はそれを補完する港として、覇を競っていた。

丸子船が、いつ頃どのようにして完成したのか、その詳しい歴史は明らかになっていないが、同じ西浅井町の塩津港遺跡から出土した精巧な船形代は、その問題を解決するヒントとなるであろう。

こうした歴史を考えれば、西浅井こそ丸子船の故郷と呼ぶに相応しい。